さいたま文学館　平成２７年度アフターファイブ文学講座
「没後１００年　漱石を読む」講座レポート（文責・文学館 T）

第２回は「『三四郎』に見る東京と故郷」がテーマです（うまくまとめられるか不安です……）。今回も寒い中、多くの方が講座に参加してくださいました。

はじめに『三四郎』の予告にある「空気」という言葉について解説がありました。漱石は予告の中で４回も「空気」を用いていますが、これほど「空気」を意識していたのは、前作『虞美人草』が関係しているだろうということでした。『虞美人草』連載中に高浜虚子らに送った書簡には、漱石が苦心しながら『虞美人草』を書いていた様子が見えます。虚子には「虞美人草はいやになつた」と書き送っていますが、日付からすると連載開始からひと月も経っていない時期です。「いやになった」のは「僕は此セオリー（注：理論、理屈）の為めに全編を書いてゐる」という一言に見られるように、自身の理論を小説の形で表そうとしたからなのではないか、とのことでした。セオリーを説明するために小説という形をとることで、理論について具体的に語ることはできますが、時に理論の抽象性や普遍性に収まらない事も出てきます。小説にとってはむしろ作中の「個人」や「出来事」の具体性が重要で、『虞美人草』でいえば、あの「藤尾」のエゴイズムを小説という形で表現された「セオリー」で否定できるだろうか……。ここに漱石の苦悩があり、『虞美人草』とは違うタイプの小説として『三四郎』を書く背景があるのではないか、というお話でした。

そこであらためて『三四郎』の予告を見てみると、「手間は此空気のうちにこれらの人間を放す丈である。あとは人間が勝手に泳いで、自ら波瀾ができるだらう」という言葉が見えます。理屈や理論に縛られず、登場人物を自然な姿のまま描いてみたいという漱石の思いに触れたような気がしました。

ここからいよいよ本題に入っていきました。

東京に向かう車中で出会う人々と関わる様子からは、故郷を離れる三四郎の心細さ（色黒の「京都から相乗り」の女と出会って「異性の味方を得た心持ち」を感じる場面）や、作中で関わりが多くなる「東京の男（広田先生）」との出会いなどが解説されました。

その後東京に出てからの話になっていきましたが、特に広田先生と美禰子について丁寧な解説がありました。

三四郎は広田先生を「批評家」と感じ、「自分も批評家として、未来に存在しようか」と考えますが、広田先生は西洋を基準として古い日本を批判しますが、広田先生は西洋に行ったことがなく、西洋を「写真で研究」している男として描かれています。そうしたことから広田先生の時代認識の誤り（「九段の燈明台」が「江戸名所図会」に出ているということなど）も生じているとのことでした。広田先生のような人物を描いたということは漱石の近代日本観にも通じるのではないかと感じましたが、そうしたことは第４回で詳しく説明されるとのこと。最終回を楽しみにしておきたいと思います。

三四郎による「三つの世界」について、第一の世界は「故郷」、第二の世界は三四郎が学ぼうとしている「大学」、そして第三の世界は具体的な場所ではないようですが「美禰子たちのいる深厚な世界」であると説明がありました。

第一の世界は、普段は封じ込めていて、便りがきたときなどは懐かしく思い出している場所。戻ろうと思えば戻れる世界ではありますが、いざとならなければ戻ろうと思わないところです。第二の世界は学究の男性ばかりで、現実の世界と隔たった場所。出ようと思えば出られますが、三四郎は第二の世界を出てしまうことをもったいないと感じています。第三の世界は三四郎にとって最も不思議な場所です。「鼻の先」にあるのに近づき難いところ。ただ、そこに近づかなければ自分の世界に欠陥ができると三四郎は感じています。

三四郎は結論として、これらすべてを手に入れることを考えます（「国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問にゆだねるにこしたことはない」）。それは同時に、この三つの世界以外（京都から乗り合わせた女などのいる世界）は三四郎から見えていないことを意味するのだとも話されました。東京の「空気」の中で、三四郎はこうした考えになっていったのでしょう。

美禰子との関わりでキーワードとなるのは「ストレイ・シープ（迷える子・迷羊）」。繰り返し現れるこの言葉の意味について時間をかけて考えていきました。

「ストレイ・シープ」というのは神の愛についてキリストが語るたとえ話だそうです。初めに出てくるのは、菊人形を見に行った三四郎と美禰子が広田たちとはぐれてしまった場面ですが、「広田先生や野々宮さんはさぞ後で僕等を探したでしょう」という三四郎に対して、美禰子は「責任を逃れたがる人だから、丁度好いでしょう」と答えます。神ならば必ず探し出すはずの「ストレイ・シープ」を、「第二の世界」の住人である広田先生や野々宮は探しに来ません。「第三の世界」に属する美禰子と「第二の世界」の男たちとの隔絶を示すのもではないかとのことです。また、羊（ｓｈｅｅｐ）という語は単数も複数も同じ単語なので、「ストレイ・シープ」が示唆する人物は誰なのか考えてみましょうという問いかけもありました。作品の周辺に関する幅広い知識を交えながら大野先生の話は続きます。

広田先生や野々宮が美禰子たちを探さなかったのに対して、美禰子が結婚する相手は「今まで待っていたけれども、余り遅いから迎えに来た」と言って美禰子を迎えに来ます。広田先生や原口たちが話をしていたように、美禰子にとってこの男性は「自分の行きたい所」なのでしょうか。「高い所を見るのが好き」と言っていた美禰子は、そうした男性と結婚するというのでしょうか。美禰子に関する謎は、受講している私たちが考えていくべきことのようです。

広田先生と美禰子に関する丁寧な解説があったためか、終了の時間が迫ってきてしまいました。それでも大野先生は時間いっぱいまで解説を続けてくれます。

美禰子が結婚するころ三四郎はいったん帰郷しますが、漱石は三四郎が帰郷したときの様子を少しも書いていません。そこで大野先生は、三四郎が故郷でお光さんと結婚していたら物語はどうなるでしょう、という問いかけを投げかけてくれました（作者が書いていないのであくまでも想像にすぎないことですが、『吾輩は猫である』の寒月のこともありますから、とも）。作品を読むうえで広がりができる示唆をしてくださいました。

講座の最後でも、三四郎の卒業後として「国の母の元へ帰って、村の娘（お光）を嫁に迎えて、そうして身を農業経営にゆだねる」という結末があったらどうなるでしょう、という投げかけがありました。

もともと「空気」の中に「人間を放す」として書かれた『三四郎』ですので、こうした読みも可能なのでしょう。

講座の終了時には受講者から質問も受け付けてくれました。「三四郎は美禰子を思っていることがわかるが、美禰子は三四郎をどう思っているのかよくわからないのですが」という質問に、「「よくわからない」というのが正解かもしれません。ただ、思わせぶりな様子をしていることは読み取れますね」と大野先生はおっしゃっていました。

講座終了後の雑談の中で、「空気」に任せながら、それでいて破綻のない作品に仕上げているところが漱石のすごいところです、とおっしゃっていたのが印象的でした。もっとお話になりたい内容もあったようですが、９０分という時間で語りつくせないのが『三四郎』の魅力なのでしょう。『三四郎』を再読しなければ、と強く感じた講座となりました。